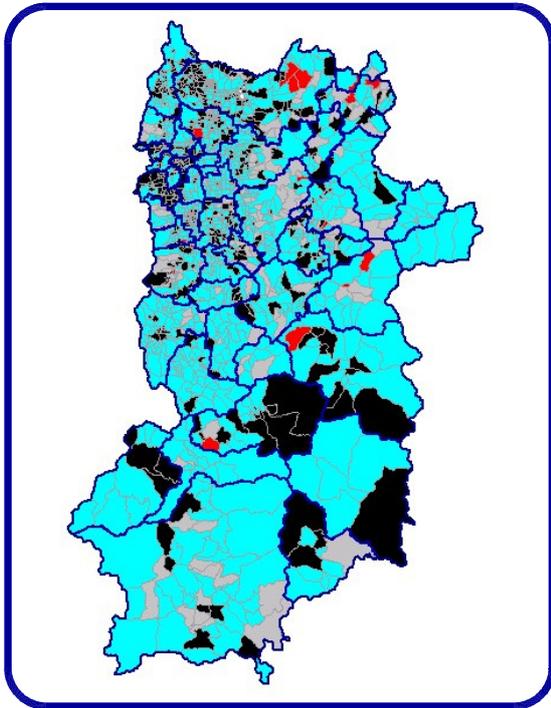


農業・林業集落アンケート調査によるヌートリアの生息状況・被害状況(平成22年度)

1. 農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布

・平成19年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布



左図は、平成19年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

農業集落でヌートリアが「いる」と回答があった場合に、「分布している」とした。回収無しには既に人が住んでいない集落も含まれている。

ヌートリアの分布は、非常に限定されていることがわかる。ただし、県北部から県中南部にかけて情報があり、平成19年度の時点で既に複数の流域に分布していると考えられる(可能性がある)。

平成19年度

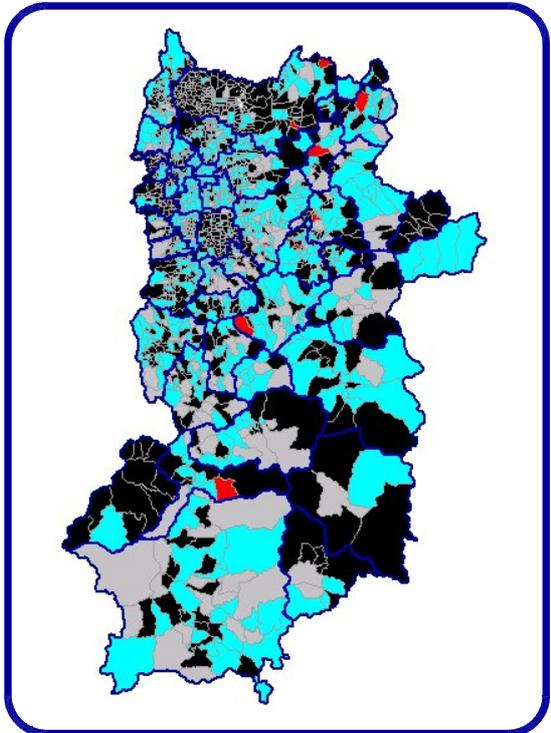
■ いる	18集落
■ いない	863集落
■ 無回答	170集落
■ 回収無	757集落
全	1808集落

凡例 図中 青線 旧市町村界

市町村界内側の線 大字・地区界

市町村界、大字・地区界の凡例は以降の図も同様である

・平成20年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布



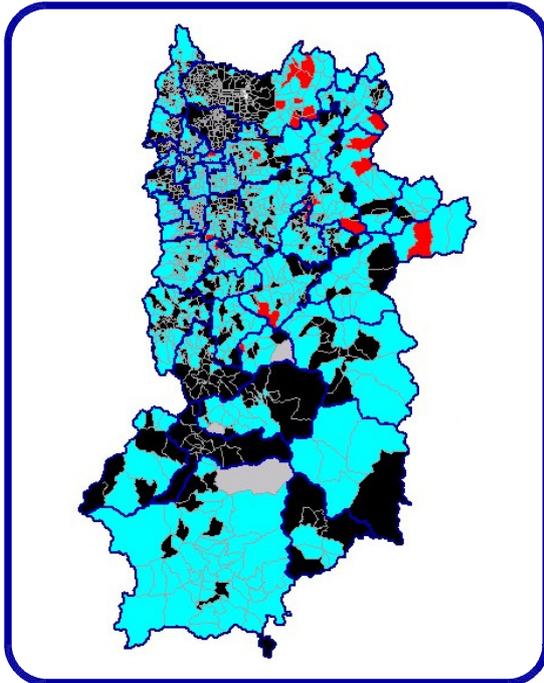
左図は、平成20年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

ヌートリアの生息域は、前年度と同様の傾向である。

平成20年度

■ いる	10集落
■ いない	565集落
■ 無回答	182集落
■ 回収無	1051集落
全	1808集落

・平成21年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布

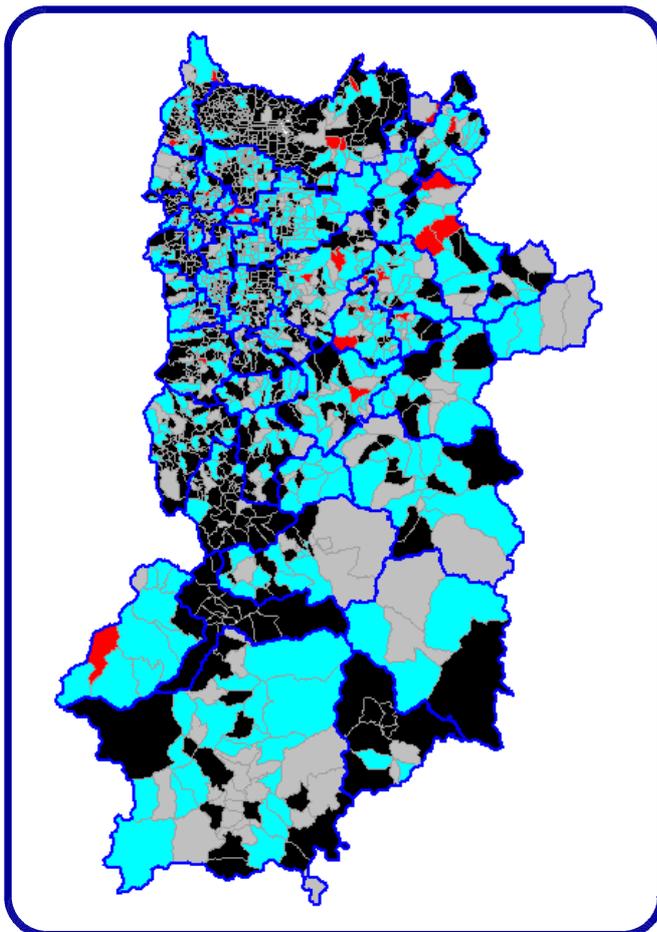


左図は、平成21年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

ヌートリアの生息域は、前年度までと比べて、県東部において広がる傾向にある。また、県中西部においても分布が見られるようになった。

平成21年度	
■	いる 31集落
■	いない 753集落
■	無回答 3集落
■	回収無 1021集落
	全 1808集落

・平成22年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布

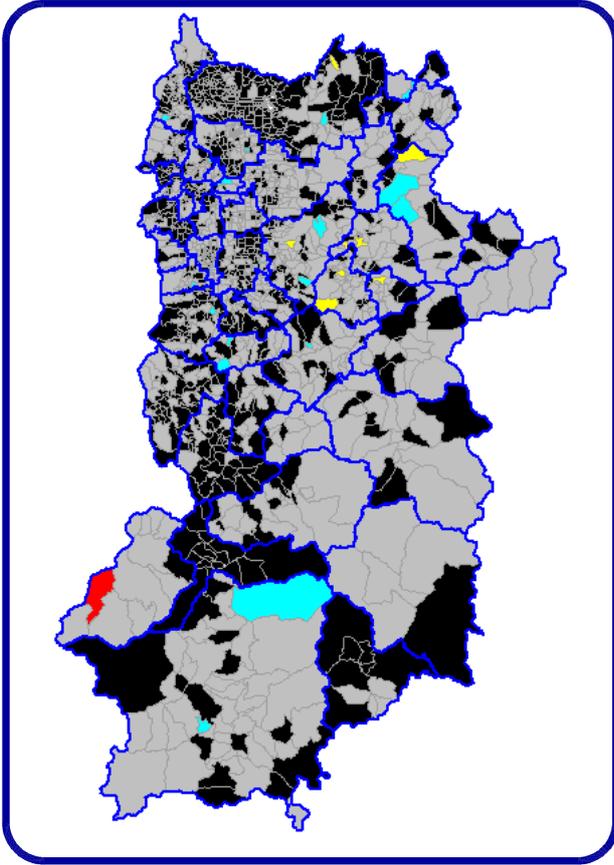


左図は、平成22年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

ヌートリアの生息域は、平成21年度と同様な傾向にあり、県北部から県東部からの情報が多い。

平成22年度	
■	いる 27集落
■	いない 524集落
■	無回答 197集落
■	回収無 1060集落
	全 1808集落

2. ノートリアの農地への出没状況



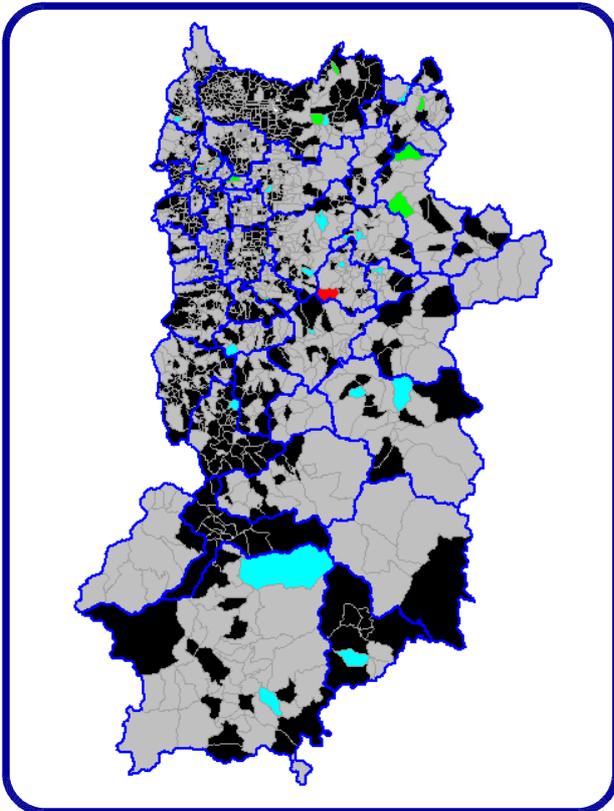
左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、ノートリアの農地・集落周辺への出没状況である。

平成22年度は「よく見る」と回答は1集落からのみで、現時点では県全域の生息数はそれほど多くはないと考えられる。

平成22年度	
よく見る	1集落
たまに見る	8集落
あまり見ない	21集落
回答数	29集落

参考)平成21年度	
よく見る	1集落
たまに見る	4集落
あまり見ない	15集落
回答数	20集落

3. ノートリアによる農業被害の大きさ



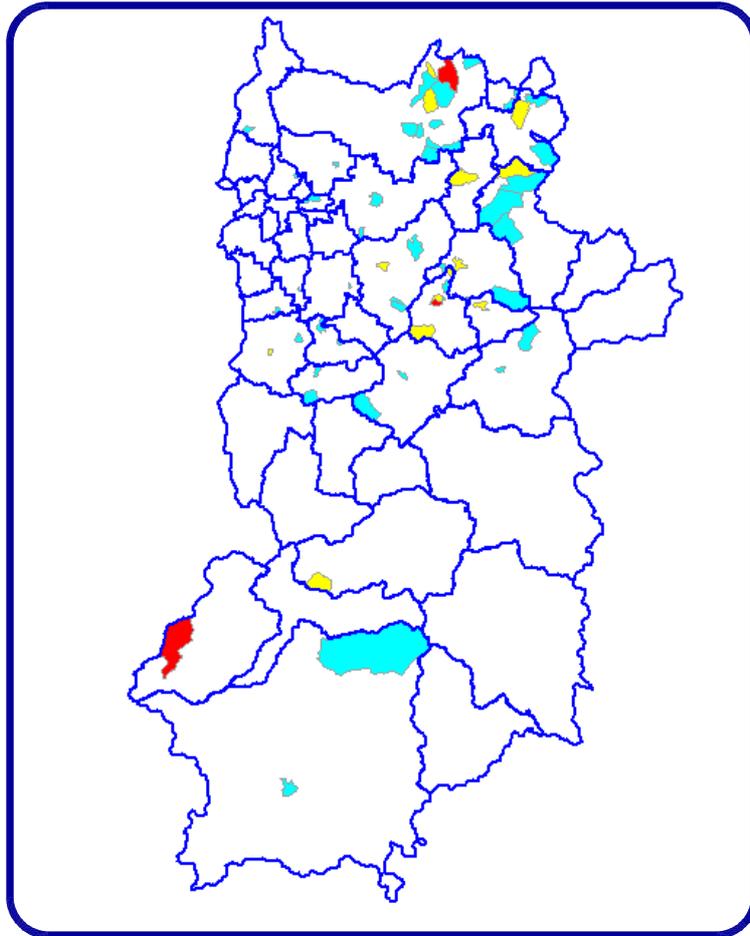
左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、ノートリアによる農業被害の大きさの意識調査の結果である。

ノートリアの農業被害は、「ほとんど無い」か「軽微」なものが多い。しかし、「大きい」と「深刻」も1集落ずつ存在する。

平成22年度	
ほとんど無い	25集落
軽微	8集落
大きい(生産量の30%未満)	1集落
深刻(生産量の30%以上)	1集落
回答数	35集落

参考)平成21年度	
ほとんど無い	13集落
軽微	10集落
大きい(生産量の30%未満)	1集落
深刻(生産量の30%以上)	0集落
回答数	24集落

図 ノートリアの農地・集落周辺への出没動向(平成19～22年度の4年間)



左図はノートリアの農地・集落周辺への出没の4年間の動向である。

毎年集落毎に農地・集落周辺へのノートリアの出没を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ているが、1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの回答を、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落に色をつけた。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。なお、空白は調査した4年間、ノートリアがいない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

ノートリアの農地・集落周辺への出没は、それほど多くないようである。しかし、県北部の一部地域では増加傾向にあり、その近辺では生息密度が高くなっている可能性がある。

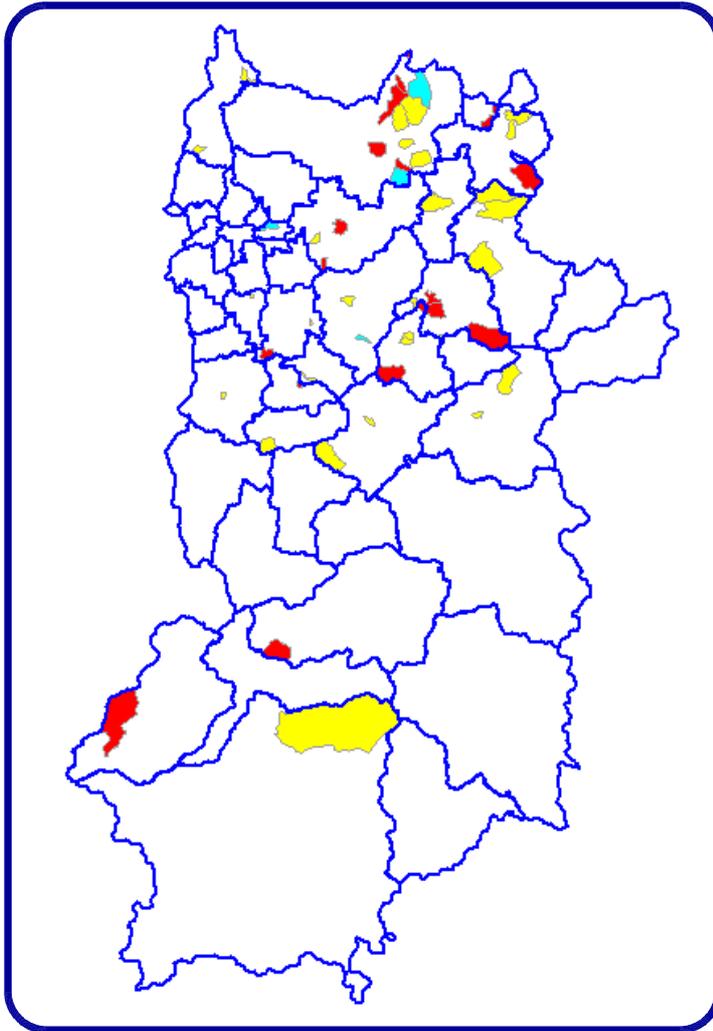
平成22年度までの4年間

よく見る	3集落
たまに見る	13集落
あまり見ない	44集落
回答数	60集落

参考)平成21年度までの3年間

よく見る	2集落
たまに見る	8集落
あまり見ない	22集落
回答数	30集落

図 ノートリアの農業被害意識の動向(平成19~22年度の4年間)



左図はノートリアによる農業被害の意識の4年間の動向である。

毎年集落毎に農業被害を前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ているが、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまり増えている場合)は赤色で、0になる場合(つまり変わらない場合)は黄色で、-1以下の場合(つまり減った場合)は青色で各集落に色をつけた。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。空白は調査した4年間、ノートリアがない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

ノートリアによる農業被害の意識は、ごく一部では減っているものの、回答を得た集落のうち3分の1が増えたとなっている。県全体では被害は少ないものの、ノートリアが生息している地域では被害は増加傾向にあると考えられる。

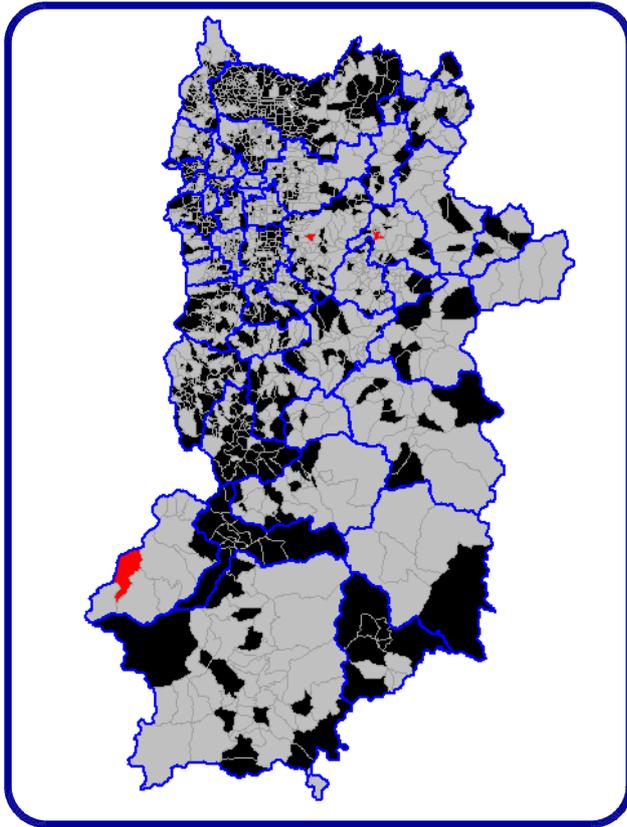
平成22年度までの4年間

■ 増えた	18集落
■ かわらない	28集落
■ 減った	4集落
回答数	50集落

参考)平成21年度までの3年間

■ 増えた	14集落
■ かわらない	12集落
■ 減った	4集落
回答数	30集落

図 ノートリアの被害対策 侵入防止柵の効果(農地)

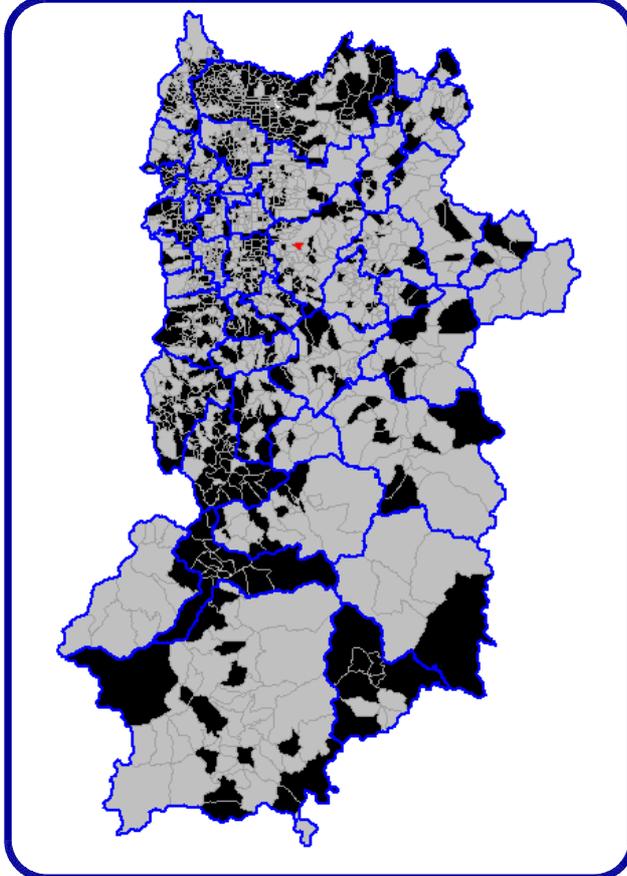


左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、侵入防止柵(防護柵)の設置の効果の意識調査の結果である。

本設問の回答は、僅かに3集落からのみであった。

■ 効果があった	3集落
■ 効果がなかった	0集落
■ わからない	0集落
回答数	3集落

図 ノートリアの被害対策 有害捕獲の効果(農地)



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

本設問の回答は、1集落のみからであった。

■ 効果があった	1集落
■ 効果がなかった	0集落
■ わからない	0集落
回答数	1集落

ノートリアについては、まだ生息数、被害共に少ないため、ほとんど被害対策は実施されていないのが現状である。しかし、対応は後手に回ると、同じ外来生物のアライグマのように被害が増加していくことが懸念される。

ノートリアは南米の動物であり、第二次大戦頃に毛皮を利用する目的で輸入され、日本各地で養殖されていた。奈良県でも過去に養殖されていたことがあるようである。

このようにノートリアは本来日本の自然界に存在するものではなく、また「外来生物法」で、「特定外来生物」に指定されていたため、外来生物法の「防除計画による捕獲」等によって、生息数や生息地が拡大する前に、積極的な捕獲を実施し、奈良県から排除しなければならない。